

るのです。これを『Educational Sports Psychology』と呼びます。

日本で本来出来上がっていた正しい武士道精神に基づく「武の道」がこれにあたるのではないのでしょうか？ この『Educational Sports Psychology』に基づき、以下、私自身の考え方を通して日本版・現在版・スポーツ版の武士道精神について考えていきたいと思います。

◇スポーツと武道の教育性

オリンピックにはじまるスポーツの教育性とフェアプレー精神は武士道精神にも通じるものかもしれません。文武両道の言葉どおり、強くなることと人間として成長していくことが同時に一体的に達成できる。これこそが真に強くなることではないでしょうか。そのことを今一度思い出し、武道・スポーツ関係者として考える必要があると思います。

スポーツだからこそ……

人間が本来めざすもの、それは自分らしさを追求し自己成長することだと思っています。だからこ



「武の道」は「人の道」

そ、その結果として、「勝つ」ことに意義が認められるのだと思います。まさにこの大きなテーマとために闘うことの大切さを、スポーツはわれわれに教えてくれるのです。

スポーツだからこそ一生懸命できる。スポーツだからこそ心と体のつながりを感じる。スポーツだからこそ負けた悔しさを学ぶ。スポーツだからこそ反省する。スポーツだからこそ応援できる。スポーツだからこそ喜べる。スポーツだからこそ泣ける。スポーツだからこそ達成感がある。スポーツだからこそ共感できる。スポーツだからこそ自分を知ることができる。スポーツだからこそ仲間を知ることができる。スポーツだからこそ勝つとは何かを知る。スポーツだからこそ……。

そんなメッセージのないスポーツには何ら意味はない！ と私は信じています。このようにスポーツをとらえることができれば、スポーツの教育性はよりクローズアップされるはずだと思うのです。

オリンピックにはじまる教育性とフェアプレー精神

さて、スポーツの教育性といえは、まずオリンピックが浮かびます。「参加することに意義がある」で始まったオリンピック。すなわち、オリンピック創立当初から、創設者ピエール・ド・

クーベルタンの考え方によって、スポーツの教育性が強調されました。

クーベルタンによって「スポーツは、平和教育のモデルであり手段である。それは全人的に教育された人間による平和な競争に基づく活動である。その際、オリンピック競技における個人的な勝利の追求は、人間としての完璧さの追求の表現である。スポーツはこうした目標を達成するための道程である。そして、オリンピック大会はこのような教育が包括される教育的な場である」というような趣旨のコメントが出されています。

それではオリンピックで強調されていた教育性とは主に何だったのでしょうか？ ドイツスポーツ教育学で有名なグループとクリューガーはそれを「フェアプレー精神」であると述べています。英国スポーツにもみられる伝統的な考えです。すなわち、フェアプレー精神こそ、スポーツマンの最も大切な美徳であるとするものです。

「フェアプレー精神の内容は、競技に臨む覚悟、相手に平等なチャンスを与え、起こり得る結果に心を左右されない、心の準備である。さらにフェアプレー精神は、規則を守り、敗北をフェアに受け入れるという共同の合意を含んでいる」と彼らは述べています。

このような「フェアプレーの精神」は本来、新渡戸稲造が提唱する「武士道精神」にも通じるものかもしれません。「フェアプレーの精神」の育成が日常生活の生き方に活かされるという考

え方こそが、スポーツの教育性としてとらえられる点でしょう。それはもちろん、武道についてもいえることだと思えます。

オリンピックに見る「フェアプレーの精神」の衰退化とそれに代わるもの

しかし、時代とともにオリンピックの教育性は薄れ、すっかり商業主義化されてしまったという見方もあります。ある意味ではスポーツの発展の結果でしょうが、その教育性から見ると実にさびしい印象を受けてしまいます。

しかし、人間は実にすばらしい生き物で、スポーツのもつこのすばらしい教育性を欧米では新たにスポーツの中に見いだしていくことになります。すなわち、人間としての成長、教育がなければこのスポーツで力を発揮し自分らしい結果を手に入れることができないという考え方です。

スポーツにおける心技体のうち「心の教育」について注目し、その内容を体系化し確立していったのではないかと思います。その中心が『Educational Sports Psychology』です。その結果、競技力の向上とともに人間的な成長（ライフスキルと呼称されており、それは昔でいう「フェアプレーの精神」のようなもの）の重要性が強調され、新たなスポーツ文化が構築されていったの

ではないかと思えます。

一流スポーツ選手に対する欧米社会の目が、そのことを物語っているのではないのでしょうか。彼らスポーツ選手が社会の模範的人間であることをめざし、そのことが自分の競技結果にもはね返ってくることを、およびその言動が教育的役割を持つということを強く認知していることが、さまざまなスポーツ選手の活動から受け取ることができます。

NBA(全米プロバスケットボール協会)でいえば、再度復帰することになったマイケル・ジョーダン選手やゴルフ界を超えて世界のスーパースター、タイガー・ウッズ選手、MLB(米大リーグ)のマーク・マグワイア選手などはその良い例でしょう。スポーツ界を代表する彼らには常にスポーツのもつ教育性を担わなければならないという社会の目が存在しているし、彼らも自分のため、また社会のためにそれに応えています。この学問的な構築と社会背景は、スポーツの教育性をキープするために大いなる役割を果たしたと考えられます。

「武士道」の取られ方とこれから求められるもの

さて、「武士道」にはそもそも良否両面あることになったのも、さまざまな時代背景や取られ方の違いによるものなのでしょうか？ 江戸時代初期の儒学者・中江藤樹は、私が武の印象の

一つとして述べた「文武両道」を説いた人です。

中江藤樹は『翁問答』の中で、以下のように述べています。

「天を経とし地を緯として、天下国家をよく治めて、五倫の道を正しうするを文という。天命を恐れざる悪虐無道の者ありて、文道をさまたぐる時は、あるいは刑罰にて懲し、あるいは軍を起し征伐して、天下一統の治をなすを武という。しかる故に、戈と止ほこという二文字を合わせて武の字作りたり。文道を行なわんための武道なれば、文道の根は武なり。そのほか万事に文武の二は離れざるものなり」

文道を教育的な人間の営みとすれば、武はそれになくはならない存在であるとうたっています。武は文の反対でもなければ、敵でもない。五倫の道を極めるためにも必要な存在であると……。したがって、その武の道は人の道に通じ、教育的なものでもなければならぬということです。

一方、山本常朝つねともはその著『葉隠』の中で「武士道とは、死ぬこととみつけたり」と言っています。この有名な言葉にはさまざまな解釈の仕方が存在するような気がするのです。

一つはいつ死ぬかわからないという覚悟をもって生きていると、一瞬一瞬を大切に生きようと

する。その結果、自然と礼節が定まった生き方を心がけるようになり、人間としての成長が身についてくるのではないだろうか？ すなわち、「武道」だからこそ、そこに教育性があるという見方です。

また一方、死ぬ覚悟で戦っているような「武士道」だからこそ、どんな手を使っても勝たねばならぬ、勝つべきだ、というような見方にも取ることができます。この考え方は、日本流スポーツに今でも残っている考え方に通じます。

スポーツですら、この解釈の「武士道」精神が宿っていますから、ましてや「武道」では想像に難くありません。そう思うのは私だけででしょうか？ そうです、オリンピックやスポーツにも通じるように、さまざまなとらえ方や時代によってその本質は変わってしまいます。

今「武道」界でも違った「武士道」精神に基づく指導が行われているのだとすれば、本来「武道」で養う必要のあった教育的な意義や、勝つためにまず強調されていた人間成長といった人間教育性の大切さが、子どもたちに伝わらなくなっただけとしても、なんら不思議なことではありません。本来の「武士道」精神が何だったのか、あるいはどの「武士道」精神が正解なのか、といったことは問題ではないように思うのです。

スポーツ同様に、「武士道」を通じた人間としての成長こそが、その存在意義だと信じます。

そして、それをまっとうしていくことが、これからの二十一世紀に生きる大人たちの務めだと思
うのです。「文武両道」の言葉どおり、強くなることと人間として成長していくことが同時一体
的に可能であり、それを実践していくことこそが真に強くなることだと考えます。

微力ながら私はスポーツの世界でそのことを主張し続けていきたいと思っています。